

# 横浜歌人会 会報

## 106\*

横浜歌人会会報 第106号

### 目次

- \* 01 伝統の不断の更新を——平成 25 年度を迎えて…横浜歌人会代表委員 千々和久幸
- \* 02 総会・新春歌会・懇親会報告
  - 03 新春歌会報告…角宮悦子/河北笑子/渡辺礼比子
  - 04 新春歌会詠草
  - 06 懇親会ご挨拶…鎌倉歌壇会長 尾崎左永子さん
- \* 09 横浜エッセイ…池谷しげみ/丸山美寿子/伊藤宏見
- \* 10 新入会員自己紹介…平尾 眞/下田聰子
- \* 11 会員歌集紹介…後藤恵市 歌集『さみしいうさぎ』

### 伝統の不断の更新を——平成 25 年度を迎えて

横浜歌人会 代表委員 千々和久幸

遅まきながら会員の皆さまに新年のご挨拶を申し上げます。本年も「世界でもっともエキサイティングな集団」を目ざして前進して参りたいと思っておりますので、引き続きよろしくご支援ご協力のほどをお願い申し上げます。

横浜歌人会が新たな構想のもとにスタートしてから今年で四年目に入ります。当初にあった不安や戸惑いもおかた理解頂けるようになり、お陰様で今日まで順調に推移を致しておりますことは御同慶の至りであります。

新春歌会、文学散歩、観月会などの恒例の行事は、これまでの伝統に独自性を加えつつ深化して参りました。また研究会も短歌を超えた「表現の領域の拡大」を巡って、他の表現分野とユニークな交流会を持ちつつ今日に至っております。

本年度は研究会の新しい試みとして野毛のにぎわい座を会場にして、落語の鑑賞と落語家との交流会を企画致しております。落語も大きく言えば表現と想像力の世界であります。表現を効果的にするという観点で言えば、間の取り方など短歌の呼吸に通ずるものがあるかと思えます。横浜にいてにぎわい座を知らないというのは、何だか勿体ない話であります。

この企画は費用の関係もあり従来の研究会にも増して外部の参加者を募りたいと思っておりますので、よろしく御協力のほどお願い申し上げます。また文学散歩は金沢文庫散策を企画致しております。

伝統は不断に更新することがなければ、忽ち形骸化します。恒例行事に工夫と新味を加え、エキサイティングな集団でありながら、願わくば金のかからない気の置けない、余所から羨ましがられる会になるよう努力しようではありませんか。

平成 25 年度の事業計画（行事の予定など）については、10 ページをご覧ください。

# 平成25年度

## 総会・新春歌会・懇親会を開催しました――

平成二十五年一月二十七日(日)、毎年お世話になっている「馬車道十番館」にて、総会・新春歌会・懇親会が開催されました。

今年も、懇親会に尾崎左永子さんをお招きしました。尾崎さんは現在、鎌倉歌壇の会長。鎌倉歌壇と横浜歌人会の交流のはじまりとして、ご参加くださいました。

### 【総会】

総会は午後一時から。委任状を含め八十三名の会員が参加しました。

議事に先立ち、議長に後藤恵市さんを選出した後に、高橋みずほさん、山本登志枝さんを議事録署名人に指名し議事に入りました。

最初に、事務局から報告のあった平成二十四年度事業報告、会計報告・会計監査報告を承認の後、平成二十五年度の事業計画、予算案が提案され、賛成多数で採択されました。

### 【新春歌会】

新春歌会は午後二時から。司会は河北笑子さん。歌会は、従来からの方式として、参加者からの批評と第二評者による批評により歌会は進められました。

詠草参加者は四十九名、事前に送られてきた詠草を読んでの参加です。席順に従って、一首について参加者の一人が寸評を行い、その後六首をまとめて「第二評者」が、あらためて評を行いました。第二評者は当日の参加者から事務局からの依頼があつての評となります。運営委員だけでなく、多くの会員の参加による会の運営を心がけているひとつの手法です。

今回は、日ごろ顔を合わせる方以外の会員とも親しくしていただく機会でもあることから、トランプカードによる席決めとしました。参加者からは、戸惑いの声もありましたが、多くの会員から「顔と名前は知っていたが、初

めてことばを交わすことが出来てよかった」という声も多くありました。

歌会は、司会者の手際よい進行で、和やかなうちにも緊張感のある、新春にふさわしい歌会を行うことができ、午後四時四十分までの二時間半あまりの歌会を終了しました。

### 【懇親会】

最初に尾崎左永子さんから暖かいエールをいただきました。(＊詳細はp6) その後は、多くの会員の皆さんから発言をいただきました。間ルリさんなどの司会で、新会員の自己紹介、歌会で話題になった詠草作者の弁などなど。楽しい交流の機会となりました。

また、参加者に渡した歌会の座席決めで使用したトランプの数字による抽選会を行い、参加者五人に記念品をプレゼントしました。新しい趣向もあり、二時間の懇親会はあつという間にお開きとなりました。

## ■トランプの席

●新春歌会報告 角宮悦子

総会終了後、新春歌会。私たちにとって何より楽しいのは歌会。超結社で四十人ほどが一堂に会して、自分の詠草に他者の意見や感想を聞ける機会は誰しも胸が、どきどきします。今年の会は、いつもと違い工夫が凝らされていました。これまでは、とかく結社の仲間どうし、友人どうしが寄り合いがち、そんな偏りを避けようと、運営委員会で考えた末、トランプのカードを入口で配って席に着くこととしたのです。どなたと隣り合わせになるかはカード次第。皆さん、いつもと違うので戸惑いが見えましたがすぐ納得なさって、この試みは成功。

私の場合、隣席は浦崎真子さん、正面は野一色容子さん、斜向かいには刈谷君代さんがいました。浦崎さんとも野一色さんともトランプのおかげで今回始めて言葉を交わしました。刈谷さんはなつかしい人。刈谷さんが少女時代、鈴木幸輔氏のお弟子さんであった頃、私は、この人の第一歌集出版会に出掛けておりました。あれから三十年は過ぎていたなあ、横浜歌人会で再開するなんて、それもトランプのおかげで。私の斜向かいの席でにこにこ笑っている刈谷さんに、しぜんと目がゆくのです。彼女の広げている詠草プリントは草いろ色鉛筆まで使って勉強の書き込みが、いっぱい。はきはき発言している姿は、頼もしく、横浜歌人会の明日が、あかるく思えてくるのでした。トランプで割り振られ着席して始まった新春歌会、ひよっとすると私だけでなく偶然のふしぎが他に起きていたかもしれません。因みに、私のカードはスペードの10でした。

## ■新春歌会感想

●新春歌会報告 河北笑子

いつもはまだお屠蘇気分というのんびりした気分で迎えた新春歌会であったが、思いがけず今回は司会をつとめることになり大急ぎで全四十九首の歌に真剣に向かい合う。

いつもの年であれば、ああこれはいい歌だ、この歌少しわかりにくいかな？など漫然と見ていた歌稿を一首一首丁寧に読んでいく。わからない言葉は辞書やパソコンに聞き、自分自身の知識の浅はかさに冷汗を流す。造語かと思われる言葉でもなるほどと納得させられたり。一目目立たないような歌が読み込むほどにいい歌に思えて来たりする。

さて、一夜漬けで勉強してのぞんだ新年歌会。ハラハラ、ドキドキしながら表面冷静さを装い、所定の時間が終わってほっとする。しかし終わってみれば時間配分はこれでよかったか、もう少し白熱する議論が引き出せなかったか、批評者おひとりおひとりに気持ちよく発言するだけの時間があつたか、無い物ねだりをしてみる。

歌会が終わって恒例の懇親会となり、三々五々と小テーブルに分かれて楽しい歓談のうち、お酒と料理をたのしむ。いろいろな方があいさつし、例年なら歌や朗詠などが出て最後に横浜市歌を全員で合唱して終会だが、今回私は所用があつて残念ながら途中で失礼した。超結社の方々出席の歌会の司会は初めての経験だったので少しご注意をいただけるご意見など雑談の中でお聞きしたかったのだが……。

今年の新年会ほど勉強させていただけた、貴重な時間はなかつたと思う。

## ■突然のご指名で

●新春歌会報告 渡辺礼比子

行き慣れない関内の街を迷いに迷ったあげく、ようやくたどりついた馬車道十番館には、予期せぬ大仕事が待っていた。第二評者の役を仰せつかったのである。私のような新参者にとつて、これはいかにも荷が重い。担当する六首をあらためて読み直してみれば、難しいとお手上げだった歌が中に何首か含まれている。ひとり一首必ず歌評を述べなくてはならないことは承知していたから、送られてきた詠草にはもちろん目を通してきたし、辞書も引いてはきた。だが、分からない固有名詞もあり、家を出る前ならインターネットで検索することだつてきただろうに、今回はぬかつた。せめて主催者が事前に予告してくれさえすれば、じっくり取り組めたものをと、恨み言のひとつもいいたくなる。

さて、ついに新春歌会が始まり、第一評者としての順番が迫ってきた。まわりの方々も人数を数えながら、ひそかに自分の担当の歌はどれかとチェックして、準備をしておられる様子。こういう場所に馴れているベテランでもやっぱり緊張されるのだなと、ちよつぱり安心する。でも蓋を開けてみれば、さすがに皆さん、ボキャブラリー豊か、落ち着いて的確な歌評をなさる。私が第二評者として任された六首の中で、これは歯がたたないと困惑していた、「蠅螂が前脚をあげ風を見る枯れ野のここはロドス島だ 跳べ」（長野義和）の一首については、第一評者の角宮悦子さんが、「好き」「勢いがある」「リズムがいい」と評価された。はて、この歌に魅力を感じるものの解釈できない私はいかなる意見をいうべ

きか。

そうこうしているうちに第二評者としての私の許にマイクが回ってきた。そもそも横浜歌人会のような超結社の歌会では、文語口語、新旧仮名づかい、記号の使い方等々について、結社毎の主張が異なるがゆえのある種の難しさがある。立場の違いを尊重すべきなのはいうまでもないが、かといって遠慮しすぎていへばいいことをいわないのでは、忙しい時間をやり繰りして歌会にでる意味がなくなってしまう。なまいきな言い方もいけないが、その違いを組上にのせてこそ、こうした超結社の歌人会の意味があるというものだろう。ここはやはり、思った通りをいわなければ、評者の役目が果たせない。とても緊張したが、担当の六首について、まずは歌意をあきらかにすべく、作者の意図を考え、その上で私なりの拙い感想、意見を述べさせていただいた。例の「蠅螂の」の一首については、ついによく分からないままだったのだが、イソップ物語からとった作品だと教えてくれる方があったので、この種の歌については、寓意を読み取れるか否かによって読者を選ぶ作品であろうという点に触れた。こんな視点もひとつの批評になるかと思うのだが、どうだろうか。そういえばある会員の方が、横浜歌人会の二次会で突然スピーチの指名をされたため、挨拶さえ忘れ、冷汗をかいた、ハズカシイと嘆いておられた。今回私もその気持ちはよくよく理解できる。だが、ふと聴衆の立場になって考えてみれば、何の準備もなく人前に立たされ、あわてふためく人が、思いもよらぬ生き生きした表情を見せたり、意外な肉声を聞かせてくれたりするのとはなかなか興味深い。緊張感はその意外なパワーを引き出してくれるものかもしれない。急な指名をするなど随分ムゴイと見えた主催

者側の狙いは、どうやらそのあたりにありそうだった。

とはいえ、私は結社の歌会でも歌評の順番がまわってくるというついブレイキがきかなくなりここまで思っている以上のことを口に出して人に嫌われることもたまにあるのだが、やはり、今回も言い過ぎてしまい、不快に感じられた作者があったかもしれない。多分この歌人会は、人前でものをいうことなど何でもない各結社のベテラン（私などを除けば）の集まりなのだろう。

スマホなるものを持っていさえすれば、外出中でもインターネット検索ができ、さまざまの情報を与えることができるそうだが、あいにく私はそんな先端メカは持ち合わせていないし……。ついに私にもマイクが来て「はじめての百人一首に子供等は戸惑ひてをりころもほすてふ」（長谷川静枝）という新春にふさわしい大らかな一首について、自分なりの感想を述べさせていただいた。



歌会の席はトランプで決めました

## 詠草

- 1 向家の棟上げの工程二階より飽かず目守りて  
一日の早し 松本嘉猷
- 2 真白なるフェルマータの波とめどなく寄せてく  
るなり冬の真鶴 中川宏子
- 3 いくとせを受けこし風を躰にのこし老い松ひと  
つ岬に立てり 平尾 眞
- 4 あらたまの年の光に包まれて女の子一歳十歩  
あゆめり 中川暁子
- 5 譲らざる領域かたみに持つ日々のこの六十二年  
今は悔まず 丸山美寿子
- 6 星繁繁冬木と我に降るとき霧笛を聞つつ新年  
迎う 伊藤美枝
- 7 大男四人立ちあひ黒き穴のぞかれてをり消火栓  
かこみ 伊藤宏見
- 8 正月二日風すさびたり喪の庭に飛び来し白き門  
松の垂 河北笑子
- 9 文明が詠ひしこれが東一華と教へ呉れたる人を  
記憶す 人見 忠
- 10 新しき年の朝を鳴き交し尾長鳥渡れり谷戸の青  
空 土屋美代子
- 11 白富士のでんと大きくまのあたり突如あらはれ  
御殿場につく 辰巳日出子
- 12 椒の新芽匂へる手を水に洗へば浮かぶ母の面影  
はじかみ 綿貫昭三
- 13 遠からずまどぬより去る日はあらむ今年も百人  
一首の読み手す 早島和子
- 14 連弾の息合わぬまま弾き終えてたがいにほめあ  
う『軍隊行進曲』 長野道子



歌会の司会は河北笑子さん

- 15 母のやうに吾にアラ卒ありやなしや人の手借り  
ず藤田絹子に歌など詠みて
- 16 薄明に反芻しひる四字熟語魯迅寂寥井伏屈託  
小井 勝
- 17 冬ざれの仁王門にて簡淨のひかりは仁王の腹部  
野一色容子  
に及ぶ
- 18 わが干支の辰どし暮れて亡き母の巳どしとなれ  
日野原典子  
り緩るゆるゆかな
- 19 「核武装」「国防軍」の危うさに問われる姿勢  
田之口久司  
歌人の矜恃
- 20 初春の光くまなきわが庭に鳩二羽雀三十羽をり  
中村規子
- 21 花のなき初冬の庭に石路の黄の色のみが艶をま  
新田由美子  
しゆく
- 22 これからの予定を書くため手帳ありどこで転ぶ  
間 ルリ  
かどう喜ぶか
- 23 手の窪にのる鏡餅お供えしわがめでたさは一茶  
朝井恭子  
に及かず

- 24 巳歳の初詣での空雲浮きて数多並みたり白蛇の  
林 静峰  
ごとく
- 25 駅伝のランナーよりも肩越しにひらける冬の  
千々和久幸  
海を見ており
- 26 空港に音なく雪の舞いはじめ乱れ嬉遊を尽すか  
堀部知子  
に見ゆ
- 27 初詣で夕暮れ刻の境内に竹の箒がいそいそとゆ  
高橋みずほ  
れ
- 28 霽降るパリ十一区なま牡蠣にレモン絞りつ旅の  
渡辺礼比子  
おわりを
- 29 ひとすじに湖北の街道延びゆけり昔ながらの刈  
井澤幸恵  
り田に沿いて
- 30 小鳥らのねぐらは花ある枇杷の木と散歩の道に  
塚田キヌエ  
夕べ気づけり
- 31 ヘコヘコと頭を押せば古ポット最後の息をジュ  
浦崎真子  
ワーと吐けり
- 32 新玉の年のはじめの水惑星七十億の人々のせて  
野崎美智子
- 33 夕暮るる雨のほとりの部屋のうち明滅してゐる  
森 藍火  
パソコン、私
- 34 蟪蛄が前脚をあげ風を見る枯れ野のここは口ド  
長野義和  
ス島だ 跳べ
- 35 午後四時の白き俎板に日の射して出刃包丁の赤  
後藤恵市  
く光りぬ
- 36 臍を拭きつつ思ふやがてゆく港はるかな散骨の  
角宮悦子  
海
- 37 はじめての百人一首に子供等は戸惑ひてをりこ  
長谷川静枝  
ろもほすてふ
- 38 絵手紙の得意なMさんの初便り「笑顔が一番」  
田谷幸子  
と布袋様の絵
- 39 福来たれ緑こそ増せと華やげる新春の床とに楚々  
高橋庚子  
と水仙

- 40 抱くなく逝きし弟の初孫うひのまあそつくりな目  
清水八千代  
許・口許
- 41 冬ざれの庭のおちこち根をはりて蕾を抱く白花  
小寺敦子  
たんぽぽ
- 42 年を越す夕べの雲のすみれ色硝子に額を寄せて  
平野久美子  
立ち居り
- 43 探してた公衆電話横ぎるは行方不明の猫へチコ  
矢野豊子  
に似る
- 44 熊蟄くまあなじも穴大雪わが住めるここ横浜は未だ雪見ず  
小笠原信之
- 45 満月がつと内心を覗きこむ車を降りし一瞬の虚  
深志聖子  
に
- 46 葱鮪鍋の湯気をたたせていつのまにかとりのこ  
山本登志枝  
されしわれらの夕餉
- 47 コスモスの末枯れし先は藍の海波音を聞く繰り  
佐久間裕子  
返すはな嘸と
- 48 春立ちぬ「さよならだけが人生」と書きし作家  
荻谷君代
- 49 大雪の残る畑に甘藍の葉の巻きしむる力現る  
中川佐和子

横浜歌人会ホームページのご案内

会の催し物のお知らせや報告、会員の歌集  
刊行などの情報提供など、いろいろな情報  
を掲載しています。  
また、会報（第99号）のバックナンバー  
もダウンロードできます。  
URLは次の通りです。ぜひアクセスしてく  
ださい。 <http://yokohama-kk.art.coocan.jp/>

## 懇親会でご挨拶

ひとりひとりの会員に、「ね」というやわらかな響きをつなげて、尾崎さんは語りかけてくださった。ささやかな人と人の出会いは、会と会の広がりへ、思い合う心をそっと結ぶものと思う。…



鎌倉歌壇 会長

尾崎左永子さん

### 1. 楽しい仲間

鎌倉からやって参りました鎌倉歌壇の、いま会長ということになっております、尾崎左永子でございます。今日は、もう歌会はお済みになったんです、ね。みなさま、おなか空いていらつしやる…(笑)。十五分は越えることのないように、ちゃんともって参りました(時計を握りしめて)。

鎌倉も、さきほども笑っていたのですけれど、石を投げれば歌人に当たるというぐらい、歌人が多いです。それで、実朝を検証するという意味で、神奈川県歌人会で前から、実朝忌をやっておりますのと、別にまた鎌倉歌壇が応援しているのですけれど、八幡様ご自身でなさっている献詠祭(献詠披講式)があります。これが三月です。八月に実朝忌がありまして、いつも歌仲間とは結社を超えて楽しくやっております。『鎌倉百人一首』を歩く(写真・原田寛、集英社、二〇〇八)という本も書きましたし、『かまくら歌枕』(鎌倉歌壇編、冬花社、二〇一一)というのもできました。

耀ひはたちまち過ぎて見なれたる冬のかたちに  
公孫樹そばだつ 『炎環』

海の香を失ひし風に吹かれをり沖まで蒼き鎌倉  
の秋 『椿くれなぬ』

確か、横浜でも歌枕のようなの、おつくりになったのは、塩野崎宏さんが代表でいらつしやるときだったかしら…。塩野崎さんはNHKにいらして、国際にいらしたんですね。そのころ、片桐顕智さんという歌人が「NHK短歌」という雑誌の主筆で、NHKの文化研究所の所長さんだった。私がまだ、松田さえこという名前で、二十代の終わりごろですか、

NHKの仕事をやっとするようになったところに、塩野崎さんが国際部にいらしたので、よく遊びに行つて。いま考えると、仕事の邪魔ばかりしたような気もしております。

いま、神奈川県歌人会の会長になられたので、またいろいろな面で協力できることは、横浜歌人会とも鎌倉歌壇もともにしていきたいと思っております。

馬場あき子さんと私、仲がいいのですけれどね。馬場さんに鎌倉歌壇いいねつていわれて、川崎でもつくればつていたら、川崎だめなんだよ、長すぎたというのです(笑)。多摩川沿いに両側で、山のほうから海まで長いからまとまりようがない。そういうことから、横浜はとてまとまりがいいのではと思っておりますね。

### 2. 新しいさと歴史の街

それと、やはり開港という古い港の歴史と一緒に、新しいものがいつも入ってきているところだと思いますのでね、そういうもの踏まえた歌というものが、開けていったら面白いのではないかしらと思っております。

私の娘、娘だったって、もう五十にもなっているのですけれど。娘が横浜雙葉におりましたのでね、六年間PTAにいたので、しょっちゅう歩いてまして。それより前は、終戦後ですよ、私のころですから。あの、ダンスホールができたばかりで、山手のところにありますね。そこまで、東京から踊りによく来ていたという…(笑)。なにかしら、横浜っていうと情緒を感じるところがあります、もうほんとに。馬車道にしても、いま通つて、ああそうだったなあ、なんて思いましたけれど。建物がね、このご

る新しくなり過ぎた気がして、赤レンガなんか見ると嬉しくなってしまう。そういう古いものと新しいものと共存できているところは、横浜じゃないとなんではないかなと思っています。

みなさまは、せっかく横浜といういい場所にいらっしやるので、自分らしい歌、横浜という新しさと歴史と、両方踏まえていることを、表面に出すのではなくて、踏まえた精神というのは、すごく大事じゃないですか、ね。

重なりて空を限れる坂の町遠き赤レンガの壁に  
日が差す 『土曜日の歌集』

高速路の下の運河に雪の積む舟いくつありこの  
都市の冬 『夕霧峠』

たとえば、私、戦後からよく元町あたりを歩いていましたので、中国服に憧れて縫ってもらったりしたことがあります。でも、その洋服屋さんも閉まってしまいましたね。ただ、あの銀細工を売っている小物屋さんとか、あるいはコーヒー屋さんも古めかしいのがまだありますよね。

大抵、クリスマス前には元町歩いていることが多いのです。そういうときに、横浜の歌って難しいなあと思うことがありますね。私自身は場所というものを、あまりテーマにすることないのですけれど、港の見える丘公園から見た歌なんか、随分昔からあります。いま、実は、神奈川近代文学館で理事をしておりますので、この前は斎藤茂吉展（「茂吉再生―生誕一三〇年 斎藤茂吉展」）をやりましたし、しょっちゅう来ておりますので、横浜というと他所のような感じがしないですね。だから、鎌倉は鎌倉で実朝という、大きな一つの独立性のある歌人がいますのでね、そ

れをどういうふうには検証してゆくかという問題もあるのですけれど。そういう地域、地域で独特のものができてゆくところで、またひとつの新しいものが生まれてくれば、神奈川県全体というものも、また東京を取り巻くなかで、違う色彩が出てくるのではないのでしょうか。

### 3. 自由にうたう

私の場合は、ちよつと、歌人といわれると困ってしまうというくらい、どちらかというと王朝文学を中心に仕事をしてきていますのでね。私は最初、佐藤佐太郎の弟子ですけど、十七歳で佐藤佐太郎のもとに入ったときも、まだ、あの正岡子規の「万葉に帰れ」が生きておりまして、古今集なんていうと、「あんな、ばかばかしいものを読むな」と先輩からいわれました。ところが私、源氏物語に取り憑かれるようになりまして、というのもアメリカにしばらくいたものから、日本語のうつくしさに気がついたんですね。こんな感性のいい言語って、ちよつと他にないのではないかと思います。それをもう一度、日本語を見直すためには古典がいいかなと思って。古典をやるつもりで、ほんの短い時代を過ごしてこつちに帰ってきました。

それから随分長いこと、古典にかかわってきたのですけれど、やはり源氏物語に中心がいつてしまひまして、去年も『源氏物語随想』（紅書房、二〇一〇）を出しました。これは、東京新聞に三ヶ月ぐらい連載していたものを、お目に留まりましたら、是非、見てください。齋藤カオルさんの新聞のときの絵まで入っています。おかしなことに若い編集者にわりに評判いいのです。なぜかっつていうと、源氏物語をはじめ、始めから終わりまで筋がわかったとい

う、そういうことも必要だと思つたのです（笑）。もうひとつは、歌をちよつと取り上げて、解釈するのいやだったのですけど。どういうことを歌でうたつていて、どういう意味があるかなあということをしつづつ加えていった、それがまあ、よかつたのかもしれない。

自分としてはね、歌のなかに古典がそのまま生きているとは思わないのですけれど、とくに短歌は定型をもつ現代詩だというように思っていますので、古めかしいものとは思っていないところがありません。現代詩だというところから口語かということになつてしまふ。でも、この前、穂村弘さんと話したときに、口語使うといつても、その歌のなかに入れてくる口語というのは、ただその辺でしゃべっている言葉と違いますよねと、そういうことがわかつている人たちがいるのですね。そうしたことは、すごく大事だろつと思ひます。

一方、古い言葉を、覚えてたての言葉を一生懸命使うのは、ひとつの技術かもしれないけど、やはりどんな古い言葉を使つても、感覚は現代詩であつてほしいし、そうでなければ、いま歌つくる意味がないのではないかなというのが最近の印象です。だから、もつと自由になつていいのではないのでしょうか。自分の言葉でうたつてみるのが一番いいのでは。いま、年をいうと私恥ずかしいのですけれど、八十五歳です。八十過ぎてから、すごく楽になりましたね。

三十二、三のころから十七年間、短歌から離れ、その間古典をやつていて、またラジオの仕事をしてましたし、合唱組曲も本で十二冊出ています。だから合唱部門の方たちは、私を作詞家と思つている人もいるのです。短歌の世界では歌人と呼ばれますけれど、歌人と呼ばれるとちよつと恥づかしいような

ところがあります。

#### 4. 律と響きと

私の年になると申しましたけれど、歌はやはり律と響き。これは千三百年に渡って完成された形であって、律をあんまり崩すこととか、音を度外視するのはやめたいなと思います。やはり、耳から入ってわかるようにするのが本当じゃないでしょうか。響きが、大事じゃないでしょうか。

私はいろんなことやってきましたので、一時、漢語脈の言葉というのがどのくらい使えるかと思つて、いろいろやってみたことがあるのです。『炎環』(砂子屋書房、一九九三)という歌集は、それ一番ひどいときなのですけれど。どこら辺まで詰めた言葉が使えて、耳から入って、どの辺まで読者がわかつてくれるのだろうと、ちょっと実験的にやってみた時期があるのです。その時期を通じてきたからよかつたのかもしれないと思います。

定型となりし記憶の頭つしばし夏のレモンを絞りてをれば  
『炎環』  
今生きてかく緩やかに息を吸ふ夏の終りの夕風  
のまへ  
『椿くれなぬ』

いまはやはり、わつと読んでわからないと無理ね。わかる歌が最高だろうと思いますし、それはもう、啄木の歌にしたって、牧水の歌にしたって、茂吉の歌にしたって、いい歌は口をついて出てきます。そういう歌が一生にひとつでもできればいいのではないかというのが、いまの感想です。

あと三分ぐらいありますけれど、みなさまおなかもお空きになったと思いますので…(笑)。これから

横浜の会が盛んになりますように、また鎌倉にも是非、遊びに来ていただいて、交互の、交流ができればいいと思っております。いたりませんけれど、この辺で失礼いたします。(拍手)

#### ●note

横浜歌人会では、会報を第99号からリニューアルしたが、お読みいただいた尾崎さんから会へ、お便りをいただいた。それは、人の心を支え、組織の勢いとなることを知っていらつしやる方からの、あたたかな応援のエネルギーだった。

しばらくときの過ぎたある夏の日、お便りのお礼をお伝えすることができた。そしてさらに、横浜へ遊びに来ていただけるお心に触れ、運営委員会にそのことを報告したところ、地域から短歌の広がりや発展を誓い合う機会にしてはと、長野義和さんの提案があり、鎌倉歌壇と横浜歌人会の交流のはじまりとして、お招きすることになった。

ひとりひとりの会員に、「ね」というやわらかな響きをつなげて、尾崎さんは語りかけてくださった。ささやかな人と人の出合いは、会と会の広がりへ、想い合う心をそつと結ぶものと思う。いま、私たちは、どこかでなにかがこわれそうな危うさについて、自分だけはこの確かさにはがらうとし、関係が崩れそうになっている時代にいる。そんな時代だからこそ、温もりに触れたところから、新しい関係がしずかに息づいていけるよう、未来へ向けて地域同士のつながりを大切に育んでゆければと思う。

そのような地域の関係のありかたを受け止めてくださった尾崎さん心から感謝申し上げます。(高橋みずほ)

尾崎さんのご了承を得て、本文中に新たに短歌を挿入いたしました。

#### 「横浜歌人会会報」第一〇五号のご紹介

今年四月に発行された会報第一〇五号では、昨年七月に開催した研究会(シンポジウム)を特集しています。

テーマは「『いま・ここ』で／を表現すること」。短歌という表現形式の豊かさや可能性を考えるために、文芸以外のジャンルの作家を招き、その方法の特色や意味、また作家としての展望などを伺いながら、議論、交流を行いました。誌面には、シンポジウムで使われた写真なども多く掲載されています。会報は横浜歌人会のホームページからダウンロードができます。

<http://yokohama-kk.art.coocan.jp/>

#### ▼シンポジウムの概要▲

○テーマ『いま・ここ』で／を表現すること  
○日時 平成24年7月27日(金)  
午後6時～午後8時30分

○会場 かながわ県民センター三〇一会議室  
○シンポジスト 〃  
・手嶋尚人さん(建築/東京家政大学准教授、谷中学校運営人)

・伊東純子さん(服飾/urien 主宰)

・樋口賢太郎さん(グラフィックデザイン/すいせい主宰)

○コーディネーター 〃

・吉野裕之さん(横浜歌人会副代表委員)

横浜に暮らして二十年余り。大きな顔をして横浜の人間です、というのにはばかられるが、人生の三分の一はここで過ごしている。海から二キロほど内陸にあるわが家には、曇の低くたれこめた日だけ、汽笛が聞こえてくる。音が空に広がらず、蓋の役目をする雲の下を伝って、低く太い音が届くのだろう。あらためて港の存在を身近に思うひとときである。

すぐ近くの散歩道には「黒船をみる丘」と立札のたつ一角がある。埋め立てられて、現在は磯子の海がやや遠くなったが、幕末のころ、村人はここから大きな黒船をながめて、どれほど恐ろしい思いにさられたらうか。季節がめぐれば合歓の花が咲き、立葵やグラジオラスが風にゆれる静かな丘である。

名高い商店街横濱元町はむかし元村といった。開港を迫られた幕府は、便利な海辺の地域を外国人居留地とした。漁村を追いやられた漁民たちは、山下や本牧の地区へ移住を余儀なくされた。山下へ移った村民たちが、やむをえず商店を営もうと、外国人向けの品をそろえたのが、商店街の始まりである。彼らの通勤路だったのだ。自分たちこそが元々の横濱村の人間だった、とのつよい思いから「元村」と名づけられ、時代とともに「元町」となったという。

この話を知ったとき、実は少々ショックだった。誰かの痛みや無念がここに残っているかのような気がしたのだ。時を経て、その一帯が横浜のシンボルのひとつとなったことを思いつつ、何ごともなかったかのような明るい通りを歩く。たかだか、百五十年ほどまえのことである。

「お住まいは？」「はい、横浜です」「良い所ですね」。こんな会話を幾たび交わした事であろうか。「お生まれは？」「信州の安曇野です」「良い所ですね」：とそれぞれ憧れの地でもあるかのよう言われる。確かに港町ヨコハマの魅力はエキゾチックで洗練された堂々とした風格を持ちながら、反面気さくで庶民的な暖かい雰囲気のある所であろうか。半世紀近く横浜に住み、六十二年の結婚生活の大半を過ごした今では第二の古里としてかけがえのない地となっている。

険峻な北アルプスに囲まれ、海のない生地信州安曇野もそれなりに豊かな恵みはあるが、豊饒な多摩丘陵に続く肥沃な地と、大きく展けた海に恵まれた横浜との風土性の違いは人々の上にも出ていて面白い。横浜気質とでも言うのか実に屈託なく明るい。その上誰にも親切で面倒見がいい。これらは急激な文明開化による連帯意識の強さから来ているとも思われる。

東京に次ぐ大都市の瀟洒な都市空間を持った横浜と、下町的で庶民的な明るいイメージの横浜とが混然とあり、その上自然体で両立している所も面白い。わが青葉区は、緑の深い森や泥鰌のいる田んぼや小川があり昔のままの風情が随所に残っていて楽しく。鶴見川の源流には夏は闇夜に螢が飛び幻想的な界が展げる。この大らかで豊かな横浜の風土に包まれ同化し坂多きこの街に風の様に過ぎて行き度い。

坂多きここはわが街風の町押されてわれも風となりゆく

横浜の歌人といえば、中世の印融法師を除いて、維新から明治初期に活躍した僧弁玉だろう。

この人の来歴を云うと、江戸浅草に生まれて、俗姓を大熊氏。明治になっては、大熊弁玉といい、浅草弁天町の橘守部（一七八一〜一八四九）の門に入り、神仏分離令により、一時僧徒に祝詞のつくり方を教えている。

維新のころ、現在の神奈川区青木橋の近くの桐畑につづく三宝寺の住持となり、専ら近郊の子弟を集めて、和歌の指導を行っていた。

私は平成二十年十月より、この人の『瑠々室集』を通釈解明に努力して月刊誌「沙羅」に毎月連載してきたが、なかなか奥深い内容に驚き声をあげざるをえないでいる。

現在に至るまでに、この『瑠々室集』の約三分の一に達しているが、どうか全編に亘って通釈が完了することを願っている。この集は、長歌が主体であるが、短歌も含まれており、維新よりの横浜の近代化を辿る一部始終を見て観察し、詠歌として残している。謂わば当時の歴史の生き証人でもあるわけだが、例えば今日の鶴見の操車場での交通事故のナンバーワンを記録したり、天地をゆるがし、大きな芋虫が煙りを吐いて、汽車が走ってきたり、などのことである。この集は明治十二年に上梓され、近藤芳樹の序文がついている。のちに明治三十二年佐々木信綱編の明治名家集上に収められ、博文館より刊行されている。久し振りに望欣台を訪ね乍ら、弁玉さんの墓所へ。

## ■はじめまして

●新入会員自己紹介 平尾 眞

職を退いて暫くを経てから実作を始めました。短歌はなんとなく好きで時どきに読んでいたのですが、実際に自分が作ってみるとこれがなかなか難しい。本格的に学ぼうと結社「日本歌人」に入会して、毎月の歌会出席と社誌への出詠を続けています。そして、その学びの間口をもう少し広げようとこの度横浜歌人会に入会させて頂きました。

短歌は学ぶほど難しくなるのを実感しています。人の作品を読んできちんと鑑賞するのも難しいけれど、作るのもっと難しい。苦勞して探し、見つけた言葉が間延びの言葉になったり、独りよがりの言葉になったりなどと歌会で批判を受けるのはしつちゆうです。それがまた妙に楽しくて次の一首作りへのエネルギーになります。また、人の作品では知らない言葉や知見に出会ったりもします。憧れて覗いた道ながらなかなか奥が深いことを覚えさせられています。

人生を二毛作に喩える言い方がありますが、私の場合、取り組んだ短歌を二つめの作物とするならばその作付けが少なからず遅れたようです。また、促成栽培も難しいようです。

されど折角踏み入った道なればもう少し短歌というものを見極めたく思っています。皆様のご先導が頂けるならば幸いです。

## ■学びの日々を

●新入会員自己紹介 下田 聡子

此の度は、「横浜歌人会」事務局長の長野義和様から御丁寧なるお便りを頂き、大変恐縮に存じております。有難う御座いました。

内容は新会員自己紹介として文面をまとめる様にとの事、その様な文章を書きますのは始めてのことですので、大変驚き、又、どの様に書き表わせば良いのか、戸惑い、その上に、私は大變筆不精ですので、大變遅くなりました事を深くお詫び申し上げます。

私は昨年九月に初めての拙い歌集ですが、『むつのひかり』（現代短歌社）と云う歌集を発売させて頂くことが出来ました。これも偏に「沙羅短歌会」の主宰伊藤宏見先生の細やかな御指導のあつたればこそと感謝の気持ちで一杯でございます。

今日に至るまでには、年齢だけが多いのですが、短歌の道では、まだまだ未熟ですので、此の度の歌集『むつのひかり』の発刊にあたりましては、伊藤宏見先生には勿論のこと、先輩各位の皆様、そして「沙羅短歌会」の皆様様の御指導と御力添えがあったればこそと思っております。又、伊藤宏見先生の作画題、序文、そして、会員の先輩の方々の跋文、そして何回もの校正のお仕事まで御多忙のところを御協力頂き、印刷の方では現代短歌社の方々による御尽力の御陰と、大勢の皆様によって頂いたものと、深く感謝の気持ちで一杯でございます。

これからも、年齢を考えて、伊藤宏見先生に勧められた「横浜歌人会」の御指導のもと、一步一步、皆様を見習って頑張っていきたいと思っておりますので宜しくお願い致します。

## 横浜歌人会平成二十五年度事業計画

- (一) 新春歌会
  - ・開催日 平成二十五年一月二十七日(日)
  - ・会場 馬車道十番館
- (二) 第三回文学散歩・即詠歌会
  - ・開催日 平成二十五年四月二十四日(水)
  - ・場所 称名寺・金沢文庫散策
- (三) 第十九回会研究会
  - ・テーマ 落語鑑賞会と落語家交流
  - ・開催日 平成二十五年七月三日(水)
  - ・会場 横浜にぎわい座
- (四) 観月会
  - ・開催日 平成二十五年十月十九日(土)
  - ・会場 東天紅・横浜桜木町ワシントンホテル店
- (五) 会報の発行
  - 短歌の創作、評論の研鑽、短歌に関する情報発信、会員の情報交流の場として年三回の会報を発行します。
- (六) ホームページの運営
  - 会の紹介をはじめ、会の催し等の告知・報告、会員の歌集刊行の情報提供、横浜に関連する歌人の紹介、関連団体へのリンク等を通して、情報発信・情報交流を行います。
- (七) 会議の開催
  - 総会は、年に一回開催し、運営委員会は、概ね二ヶ月に一回開催します。

後藤恵市歌集『さみしいつぎ』

この歌集は『水銀灯』につづく第二歌集で平成十六年五月から平成二十四年三月までの八年弱に作歌したおよそ五百四十首を収録したものです。作品は大部分が所属結社の「日本歌人」に発表したものですが、一部、同人誌や商業誌等に発表したものを併せてほぼ制作順に編集しました。

この期間は長年勤めた信託銀行を退職し、その子会社である証券代行事務会社に再就職していた期間とほぼ重なります。サラリーマンとしては最終コーナーを走っていた時期に相当します。こうした時期は公務員にも民間企業のサラリーマンにも共通にあると思いますが、それなりに忙しいものの出世競争からは解放（疎外）された時期でした。つまり精神的なゆとりはあり、短歌にも打ち込みましたが、何となく宙ぶらりんで目的意識を喪失した時期でした。完全にリタイアし、居直った現在とも違う中途半端な感覚ですね。

こうした宙ぶらりんの時期には、「私とは一体誰なんだろう」とか「私は何処から来て何処へゆくのか」などという、いくら考えても分かるはずのないようなことをつい考えてしまいがちです。そんな想念を短歌の形にまとめた歌集です。

また、この期間に千葉県流山市から横浜市金沢区

に転居し、横浜歌人会にも入会しました。今後とも宜しく願います。（後藤恵市）

【自薦十首】

誘はれ途中下車すれば夜の底に見知らぬ街のしんめりしてゐる

終点の車内に残りし傘一本そのまま車庫に運ばれて行った

グランバーンと揺れてゐる鼓膜の奥のみづかねの池

父逝きて葬祭場で共に寝ぬ「まあまあぢやないの」と遺骸に語る

さかしまに時の流れて卵となり有袋類の眠りに落ちぬ

右の手がまだ見つからぬどうしよう日暮れの道をとぼとぼ行きぬ

ひるがほの纏ふフェンスの赤錆びて閉ざされし窓に午後の陽の射す

空も地も車も人も犬猫も朱に染まりゆく野毛のゆふぐれ

影曳きて前ゆく男ふと消えぬピルの合間の夜の裂け目に

高校の同期会にて跳びはねるゴマシホ頭のさみしいうさぎ

・発行しながらみ書房

〒101-0061 東京都千代田区三崎町三

二・一三 秋和ビル四〇六

電話 03-3234-2926

・発行日 二〇一二年八月一日

・定価 二七〇〇円（税別）

「横浜歌人會会報」第一〇〇号のご紹介

二〇一一年二月に発行された会報第一〇〇号では、特集として、歌人として長く活躍してこられた岡部桂一郎さんと草柳繁一さんにお話をうかがいました。A4判44ページの充実した一冊です。

会報は横浜歌人會のホームページからダウンロードができます。

<http://yokohama-kk.art.coocan.jp/>

▼主な内容▲

特集・インタビュー

○岡部桂一郎さん・動かざる樹の沈黙「戸塚の谷に根ざして」

○草柳繁一さん・一冊の歌集を携えて―「胡麻よ、ひらけ」とうたいつつ

横浜歌人會会報第一〇六号

発行日 二〇一三年五月二十日

編集人 長野 義和

発行人 千々和久幸

発行所 横浜歌人會

URL <http://yokohama-kk.art.coocan.jp/>

振替口座 00200-5-77630

制作 アトリエ云／印刷 野崎印刷紙器株式会社

このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。

